

深い悲しみ

加藤 享

[聖書] マタイによる福音書26章36～46節

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行っていて祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロ およびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行っていて祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行っていて、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

[序] キリスト教の特色

教会を探す目印は十字架です。十字架はイエス・キリストの死を表わしています。十字架刑は、最も重い罪を犯した者が受ける一番厳しい刑罰です。死んでいく苦しみを出来る限り引き伸ばして味あわせるもので、イエス・キリストの場合は、朝の9時に磔にされて午後3時過ぎに息を引き取られました。多くの信仰者を集める宗教の中で、このようなひどい死に方をされたお方はキリストだけです。ですからイエス・キリストを救い主と信じるキリスト教の特色はと言えば、十字架の死と言うことが出来るでしょう。

キリストはユダヤ教の一番大事な祭りである過越しの日曜日にエルサレムの都に入り、水曜日の日暮れから始まった木曜日の夜中に逮捕され、金曜日の朝には十字架刑に処せられました。そして三日目の日曜日の朝、墓から復活されて弟子たちにご自分を現しました。そしてこの最後の一週間の記述に、マタイ、マルコ、ルカの三福音書はいずれも約三分の一の頁を当てています。キリスト教会にとって十字架と復活がいかに大事かを表していると思います。

[1] 十字架上の言葉

福音書には十字架の上でキリストが語られた言葉が七つ記録されています。ルカ福音書が記す三つの言葉は、さすがは救い主キリストでなければ語れない素晴らしいお言葉だと、誰もが素直に感動するものです。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(24:34)

「はっきり言っておくがあなたがたは今日わたしと一緒に樂園にいる」(24:43)

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(2446)

このような言葉を、**激しい死の苦しみ**の中で言える人間が、果たしているのでしょうか。私はこの言葉から、イエス・キリストを単なる人間ではなく、人間の姿をとって私たちの所に来て下さった**神、救い主**にほかならないと信じる事が出来ました。

ヨハネ福音書の記す言葉。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」「見なさい、あなたの母です」(19.:26~27)「渴く」「成し遂げられた」(19.:30) 母**マリア**のこれからを案じて、ヨハネに託した愛。神の救いの業を完了し、自分の使命を果たしたという明確な自覚を示すキリストならではのお言葉です。

ところが、一番最初に書かれた**マルコ福音書**、そしてそれを下敷きにして二番目に書かれた**マタイ福音書**は、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との**叫び**のみを記しています。そしてこのように大声で叫んで死んでいかれた方を「**本当に神の子だった**」と十字架刑を執行したローマ兵の**隊長**が言ったと証しています(マルコ 15:39)。

「**なぜわたしをお見捨てになったのですか**」—— 主イエスは、弟子たちが「あなたこそメシア、生ける神の子です」と信仰告白をするようになると、ご自分が必ずエルサレムで長老、祭司長、律法学者たちから**多くの苦しみを受けて殺され**、三日目に復活することになっていると、繰り返し語ってこられました。

そして最後の食事の席上で、ユダの**裏切り**や、ペテロや弟子たちの**我が身を守ろうとする振る舞い**を予告しながらも、ユダを含めて皆の者に、**パンとぶどう酒の杯**を与えて、おっしゃいました。「取って食べなさい。これはわたしの体である」「この杯から飲みなさい。これは、**罪がゆるされるように**、多くの人のためにわたしが流す**私の血**、**契約の血**である」(マタイ 26:26~28)。

ユダはこのパンと杯を頂いた後で、主の**逮捕の手引き**をするために祭司長たちの所に抜け出して行きました。主イエスは残りの弟子たちを連れて、いつもの**祈りの場所**ゲツセマネのオリーブ園に行かれました。「ここに座っていなさい」と8人に命じると、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて奥に進みました。そして悲しみに悶え始め、「私は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」とおっしゃると、**うつ伏せ**になって祈られました。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われました。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」。

「この杯をわたしから過ぎ去らせてください」—— つい先刻の最後の食事の時に、「**皆、この杯から飲みなさい**。これは、**罪が赦されるように**、多くの人のために流されるわたしの血、**契約の血**である」とおっしゃって、**皆に杯を飲ませたばかり**です。イスラエルの民は、その**罪の故**に神の民としての**契約を破**ってしまいました。しかし神が、キリストの血によって、再び救いの契約を結び直して下さるために、キリストが**十字架の死**

という杯を引き受けられたのです。

それなのに、どうしてこの期に及んで、十字架の死を取り去ってくださいと祈られたのでしょうか？

[2] 日々に募る罪の恐ろしさ

私の牧師熊野(ゆや)清樹先生は熊本の士族の家の出身で、宮本武蔵手造りの木刀を家宝として持っておられました。先生から繰り返し聞いた宮本武蔵の逸話の一つはこうです。武蔵は晩年を熊本藩細川侯に仕えました。或る日細川侯が尋ねました。「そちの言う剣道の極意巖(いわお)の実とはいかなるものか」。武蔵は一人の若侍を呼び出しました。「寺尾糸之介、殿の仰せである。切腹を申し付ける」。「はっ。承知つかまりました。仕度の儀もあり、しばらくご猶予のほどを願います」。静かに退席していく後姿を指さして、武蔵が申しました。「殿、あれが巖の実でございます」。

佐賀の鍋島藩の武道書葉隠れにも有名な言葉が記されています。武士道とは死ぬこととみつけたり。武士たる者、何時いかなる時にも、見事に死ぬるように心掛けるべしというのです。死に際に身苦しく取り乱さず、従容として死に臨む——これが私たち日本人の心にある美意識の一つでした。

ところが マルコ、マタイ福音書が記す十字架上の主イエスは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫んで息を引き取られています。その叫びに芥川龍之介はつまずき、作品の中で、武士の妻おしのに、このイエスを見下げ果てた臆病者と言わせて、キリスト教から離れてしまいました。

「これはわたしの体である」「この杯から飲みなさい。これは、罪がゆるされるように、多くの人のためにわたしが流す私の血、契約の血である」とおっしゃってパンと杯を弟子たちに与えて、弟子たちとの最後の食事を終えたのです。それなのに、主はゲツセマネの園に行くと、悲しみ悶えて弟子たちに言われました。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」

そして地面にうつ伏せになって祈られました。「父よ、できることならこの杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。 どうしてでしょうか？ 皆さんはこのような主イエスのお姿を、どのように受け取られますか？

最初の夫婦アダムとエバを、神は楽園に自由に住ませました。但し善悪を知る木の実だけは食べるなと命じました。善悪の判断だけは、神に聞き従えという神の心です。しかし彼らは食べてしまいました。すると彼らの家庭で兄が弟を殺す悲劇が起きました。人間が善悪の判断を自分で下して行動することで、衝突が起こり、傷つけ合う罪が生じ、死を生み出したのです。恐ろしいことです。でもこのことを、私たちは本当に恐れているでしょうか。

「キリストほど死を恐れた人はいない。それは死を、神から見捨てられることだと強く自覚しておられたからだ」と宗教改革者ルターが言っています。なぜなら、死は罪の実・罪の結果だからです。

主イエスは祈りに祈って、12人の使徒を選び、共に暮らして彼らの信仰を養いました。ところが**弟子たち**の間には、誰が偉いか**地位争い**が起こり、妬み争いが募り始めたのです。貧しい者、弱い者、病んでいる者、悲しむ者を深く愛して、ひたすらに仕えていく主イエスに従いながら、**仲間同士で争う弟子たち**。遂にはユダのような**裏切者**まで生まれました。人間は何と**罪に弱い者**でしょうか。

更に主イエスの評判とともに増し加わる**ユダヤ教指導者たち**の、主イエスへの反感、憎しみ、殺意。同じ信仰者でありながら**罪を募らせていく姿**に、罪の恐ろしさを見せつけられます。こうして滅びへと導く人間のいろいろな**罪深さ**が、主イエスの心に日増しに重く覆いかぶさってきて、担いきれない**悲しみと苦しみ**になってきたのではないのでしょうか。そして遂に、悲しみもだえ、「わたしは**死ぬばかりに悲しい**」「ここを離れず、わたしと共に祈っていてほしい」と弟子たちにも訴えるまでになってきたのではないのでしょうか。そして「人々の**罪の一切**をわが命をもって贖う**十字架の死**を、この私が**独りで担いきれる**のでしょうか。出来ることなら取り去ってください」と祈るに至ったのではないのでしょうか。

[結]御心が行われますように

しかし、主イエスの祈りはそこで終わってはいませんでした。「しかし、わたしの願いどおりではなく、**御心のままに**。」更に、二度目に向こうへ行行って祈られました。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、**あなたの御心が行われますように**。」更に、三度目にも同じ言葉で祈られました。

そして、眠り続ける弟子たちに呼びかけられました。「**立て、行こう。見よ、私を裏切る者が来た**」そして主イエスは、神の御心に従って**十字架の死**を遂げられたのでした。すると神は、主イエスに**復活の祝福**をお与え下さいました。また主の死を通して、全ての者の罪を贖い救う**命の道**を備えて下さったのでした。

自分の願いをどこまでも押し通そうとするのは、祈りではありません。それは**独り言**です。祈りは**神との対話**です。そして「出来ることならこうしてください」と自分の願いを訴えつつも、「**あなたの御心が行われますように**」と**神の決定に従うことが祈り**です。

神を信じることの出来ない人は**孤独**です。どんなに叫んでも**答えてくれる方がいない**からです。しかし、「なぜこんなことが起こったのですか」と神に向かって叫ぶ人は、必ず**答を与えられます**。なぜならば、神はイエス・キリストを十字架にかけてまでして、私たちを救おうとして下さった**愛の神**だからです。

主イエスは「わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈って進んで行かれました。私たちも、「**あなたの御心にかなうことが行われますように**」と祈りながら、神の答を信じて待ちましょう。

十字架の答は復活でした。死の彼方にもっと素晴らしい**新しい命**があるのです。何と嬉しいことでしょうか。**十字架の死**の苦しみ以上に**悲惨な苦難**はこの世にありません。でも神は復活の祝福を備えて下さっていました。神は祝福の備えのない苦しみをお与えにはならないのです。**神に見捨てられること**など決してないのです。

「私と共に目を覚ましていなさい」と主から命じられながらも、ペトロたちは、主と一緒に祈り続けることが

できませんでした。「心は燃えても、**肉体は弱い**」——本当に**すぐ眠ってしまう私たち**です。でもそのようなペトロたちを見捨てずに、祈り続けて下さる主イエス・キリストが、絶えず「目を覚ませ、目を覚まして祈れ」と語り続けて下さいます。

イエス・キリストの十字架をいつも**仰ぎ見て**生きて参りましょう。イエス・キリストを救い主と信じて、**イエス・キリストの信仰**を、私たちもいただきましょう。どんな時にも「わが神、わが神、何故ですか」と問いかけることのできる**父なる神と向かい合**って、生きて参りましょう。「あなたの**御心に適う**ことが行われますように」と祈りながら、進んで行きましょう。

祈ります:主イエス・キリストの父なる神さま。ゲツセマネであのように悲しみ悶えて祈り続けた主のお姿を、あらためてお示し下さって感謝します。主をあのように苦しませる私たちの罪深さを、私たちも真剣に自覚し、罪を恐れる者にして下さい。そして罪の赦しを心から願い求める者にして下さい。目を覚まして祈る者にして下さい。あのように悲しみ、苦しみ、十字架の救いをもたらして下さい。救い主イエス・キリストを常に仰ぎみつつ、祈り、生きる者にして下さい。主よ、平和をもたらして下さいますように。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン